

鈴木信太郎記念館だより

第3号

鈴木信太郎記念館2019年度事業報告

記念館では、昨年度も様々な事業を実施してまいりました。『半獣神の午後』の展示関連事業（講演会「マラルメ『半獣神の午後』への招待」、演奏会「ドビュッシーの音楽とフランス詩の協演 — ラの音を求めて —」）と南大塚地域文化創造館・学習院大学文学部フランス語圏文化学科との共同企画である南大塚地域文化創造館文化カレッジ「フランス文学とフランス文化に親しむ」については前号でご報告しております。今回は、昨年度実施したその他の事業についてご報告いたします。

「七夕」7月6日（土）～7日（日） 会場：鈴木信太郎記念館茶の間・ホール棟

信太郎の長男・成文氏^{しげぶみ}がお住まいになっていた頃、七夕の時期に座敷棟前の庭園に生い茂っていた竹を伐^きって門の前に出して近所に住む方に提供しており、多い年は40本にもなったそうです。そうした季節の催しを大事にしていた成文氏^{なら}に倣い、当館でも庭園の竹を用いた七夕飾りを設置しました。短い期間でしたが、来館者の方が願い事を書いた短冊と職員が折り紙で作った七夕飾りを玄関ホールの竹に飾って星に祈りを捧げました。

口演会「ふあっしょんトーク & RAKUGO ^{シェ}chez 信太郎」講師：シリル・コピーニ氏（フランス人落語パフォーマー）、鈴木深氏^{ふかし}（編集者）11月9日（土）14:00 - 15:30 会場：鈴木信太郎記念館座敷棟 参加者：18名

昨年度ご好評いただいたコピーニ氏の口演会が1年ぶりに帰ってきました。今年度の第一部はファッションをテーマとして、トークのお相手に鈴木信太郎^{れいそん}のご令孫であり、勤務される小学館でファッション誌の編集長等を歴任してきた鈴木深氏をお招きしました。トークではフランス人と日本人のファッション観の違いや近年のファッション業界の動向等について、それぞれの視点からお話いただきました。第二部の落語では、フランスに舞台を置換えるコピーニ氏独自のパフォーマンスで、上方落語の演目「ちりとてちん」を演じられ、今年も会場の笑いを誘いました。



▲当日のご自身のファッションコンセプトについて解説する鈴木氏（左）と落語を演じるコピーニ氏（右）の様子

◀七夕飾りの様子。竹を飾る花瓶は鈴木家ゆかりのもの（当館蔵）

見学会「大塚・雑司が谷 秋の歴史的建造物めぐり」講師：記念館・雑司が谷旧宣教師館スタッフ

11月24日(日) 14:00 - 15:30 会場：鈴木信太郎記念館・雑司が谷旧宣教師館 参加者：13名

毎年10月に行われる東京文化財ウィークの事業として、記念館と当館の姉妹館である雑司が谷旧宣教師館の2館を巡る見学会を行いました。両館とも最初に建物の魅力や特徴、見どころを解説してから建物見学を行いました。記念館では通常非公開としている書斎棟2階の特別見学も行き、参加者の方々からご好評いただきました。

講演会「旧鈴木家住宅の住まい方を語る」講師：初見学氏(東京理科大学名誉教授)、

11月30日(土) 14:00 - 15:30 会場：鈴木信太郎記念館座敷棟 参加者：17名

鈴木成文氏の研究仲間であり、旧鈴木家住宅の保存・活用検討会の委員を務めるなど、成文氏と親交の深い初見氏による講演会を行いました。建築計画学者としての成文氏の研究業績に加えて、成文氏がどのように暮らした、旧鈴木家住宅を後世に引き継ぐために行ってきた活動などについてお話いただきました。講演後の質疑応答では、成文氏の住まい方に関する多数の質問についてお答えいただきました。

体験教室「クリスマス・オーナメントづくり」講師：記念館スタッフ

12月22日(日) 13:30 - 15:30 会場：鈴木信太郎記念館座敷棟

参加者：8名

昨年度も行った親子向け体験教室のクリスマス・オーナメントづくりですが、今回はスタッフの作ったオーナメントを飾ったクリスマスツリーを12月6日～25日まで設置し、より多くの方に参加いただけるよう2部構成にする等、パワーアップして行いました。館内にある様々な意匠・デザインの中から気に入ったものをモチーフにオーナメントを作成しました。クリスマスツリーに完成したオーナメントを架けて写真を撮る方もおり、来年もまた参加したいというお声もいただきました。

ギャラリートーク

ギャラリートークでは毎月第3土曜日の14時から約40分間、当館の展示をより楽しんでいただける内容をお話しています。1月からは隔月でフランス文学と建築にテーマを絞り毎回異なる内容をお話することで、何回でも楽しんでいただけるように変更いたしました。2019年度は全10回(2月と3月はコロナの為中止)、計34名の方々に参加いただきました。

2019年度もフランス文学・建築・その他幅広いニーズに答えられるように様々な事業を実施してまいりました。2020年度は新型コロナウイルスの影響により、イベントの実施が難しい状況下ではありますが、安心して参加いただけるように十分な感染予防対策を行った上で実施できればと考えています。イベント開催が決まりましたら、館内掲示板やホームページ等を通じてお知らせいたしますので、興味がありましたらぜひご参加ください。

(木下 和也)



▲建造物巡りの様子(旧宣教師館)



▲初見氏講演会の様子



▲オーナメントづくりの様子

『シラノ』に序を寄せた二人の「先生」

— エミール・エックと森鷗外 —

常設展示内「信太郎の愛蔵書」コーナーでは、現在、エドモン・ロスタン作の戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』(Cyrano de Bergerac 1897年)をテーマとした展示を行っています。今回も引き続き、展示資料とそれにまつわるエピソードをご紹介します。

鈴木信太郎(1895-1970)と辰野隆(1888-1964)が共訳した『シラノ』。1922(大正11)年に白水社から単行本として刊行される際、二人は恩師エミール・エック(Emile Heck 1866-1943)と文豪・森鷗外(本名林太郎 1862-1922)に序文の執筆を依頼します。

1891(明治24)年に来日し、東京帝国大学フランス文学科で約30年に渡り教鞭を取った、カトリック修道会・マリア会の司祭エック。彼が信太郎と辰野に請われて『シラノ』の講読を始めたのは、1917(大正6)年秋のことでした。信太郎は高等師範付属中学の担任で後に『大漢和辞典』を編纂する諸橋轍次と並び、エックを「学問への道とか態度とかを私なりに決定するやうに導いた、大袈裟に謂へば、精神の形成者」と仰いでいます。その敬愛は辰野にとっても同様です。暁星中学の三代目校長となるため、1921(大正10)年に師が大学を辞した際の二人の悲しみは、以下の文でも明らかです(図1)。

恩師エック先生ガ大学ヲ去ラレタノハ君ニツテモ僕ニツテモ実ニ惜シト思フ。僕ハ全ク先生ト別レタクナイ。僕等二人ハ先生カラ見レバダダッ見カモ知レナイガ僕等二人カラ見レバ先生ハ実ニ親切ナ嬉シOncle(小父さん)ダカラネ。君ガサンチマンタール(感傷的)ニナツテ涙ヲ禁ジ得ナカッタ事ヲ本当ダト思フ。其時僕ガ傍ニモシ居タラヤッパリ君ト同じ心持ニナツタ事ダロー。

*カッコ内は原文の補足として追加



図1 辰野から信太郎宛ての書簡(1921年9月29日付)、当館蔵

一方の森鷗外は、直接の師弟関係がなくても信太郎が「先生」と崇める数少ない人物のひとりです。辰野も翻訳家としての鷗外を「翻訳自体が立派な日本文学」であり、「文章の拙い作家たちよりも遙に高い地点に立つ巨匠」と評しています。二人が作家と知り合ったのは、共通の友人の山田珠樹が、1919(大正8)年に鷗外の娘・茉莉と結婚した頃からです。文豪は彼らがフランス文学を愛好する仲間たちと発行していた同人誌『玫瑰珠』に、「随筆六則」を寄稿(1921[大正10]年6月号)しています。

信太郎らと同じく、鷗外も『シラノ』に魅せられたひとりです。1907(明治40)年に、彼が初めてこの作品を日本に紹介してから十数年。ついに全訳が刊行される喜びを、次のように語っています(図2)。

訳者は小壮の人である。そして仏蘭西文学を嗜むことが深い。それゆゑ訳文は氣を以て勝ち、情に於て優れてゐる。誰もこれを読んで、節を撃つて快と称せずにはゐられまい。

(永嶋 里佳)



図2 鷗外が『シラノ』に寄せた序文の自筆原稿、1922(大正11)年、当館蔵
信太郎はこの原稿を巻物に仕立てて大切に保管していた。

【参考文献】鈴木信太郎「悲しい自慢」『山陽新聞』1962年8月21日 / 同「二人の恩師」『毎日新聞』1963年3月6日 / 鈴木道彦『フランス文学者の誕生 マラルメへの旅』筑摩書房、2014年 / 辰野隆「鷗外先生」『老書生独語』河出書房、1951年 / ロスタン、E. 著、鈴木信太郎・辰野隆訳『シラノ・ド・ベルジュラック』(初版)、白水社、1922年

資料と建物を文化財害虫から守る IPMのお話し

見学中に館内で「昆虫調査中」と書かれたトラップや「文化財害虫調査実施中」と書かれたパネルを目にすることがあるかと思います。これらは、当館で実施している「IPM」に関するものです。「IPM (Integrated Pest Management)」は「総合的有害生物管理」とも呼ばれる、薬剤だけに頼らず生物的・化学的・物理的な手法を組み合わせることで、生物被害を防除する考えで行われている手法の事で、農業分野をはじめ、博物館、美術館、図書館等においてもこの手法によって^{ちゆうきんがい}虫害を防除することが広まりつつあります。

記念館では、2012～2014年度は年1回の全館燻蒸による殺虫・防虫対策を実施していましたが、2015年度よりIPMを導入しています。具体的には、館内全域にトラップを設置して、いつ、どこで、どの様な種類の文化財害虫(資料や建物を食害等により悪影響を及ぼす昆虫)^{くんじょう}が捕獲されるのかを把握し、状況を踏まえて適切な対処していくことが基本となります。当館の木造家屋部分は建具周りを始め、どうしても隙間が生じてしまい、外部からの侵入を完全に防ぐことは困難です。そこで、トラップを用いた捕獲調査によって文化財害虫の侵入を早期発見し、対策を取る事で館内での繁殖を防ぐことが重要になります。加えて、屋外にはシロアリ駆除剤を設置しています。シロアリ類はご存じのように木造家屋に被害を与える文化財建造物の天敵といえる昆虫です。駆除剤はシロアリ類の誘因性が高い木材を使用しており、毒餌を巣に持ち帰らせることで巣ごとの駆除ができます。また、駆除剤に引き寄せることで、建物への被害を減らす予防効果も期待されます。なお、シロアリ類はアリとついでいますがアリ類とは類縁が遠くゴキブリ類が近縁にあたり、ゴキブリ目シロアリ科に分類されています。

では、資料や建物に被害を与える「文化財害虫」とは、いったいどのような昆虫なのでしょう。最も目にする機会が多いのはゴキブリ類でしょうか。ゴキブリ類は雑食性で、文化財への被害としては書籍の装丁部分をかじる事例が多く、これは装丁に使用されている糊を食害する為と言われています。同様に書籍を食害するシミ類という昆虫は、特にでんぷん糊を使用しているものを好んで食害すると言われており、表面を不規則に浅くめめるように食害します。当館収蔵資料のうち書籍や書簡、図面などの紙資料は15,000点以上あり、その紙資料を食害する文化財害虫への対策は最も重要な課題です。その他には、紙や木製品を食害するシバンムシ類や、繊維類を食害するカツオブシムシ類、イガ類など多種多様な文化財害虫が存在します。

IPMは記念館が所有する貴重な資料と建物を後世に残していくために導入しています。本稿をご覧になって興味が湧くかもしれませんが、館内に設置している調査用トラップについてはくれぐれもお手を触れないようにお願いいたします。

(木下 和也)



▲設置している調査用トラップ



▲シロアリ駆除剤は土に埋めて設置

【参考文献】公益財団法人 文化財虫菌害研究所編『文化財の虫菌害防除と安全の知識 2019年』公益財団法人 文化財虫菌害研究所、2019年

鈴木信太郎記念館だより 第3号

発行日 2020年9月25日

発行 豊島区

編集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>

